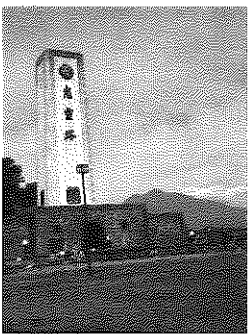


事務局長 稲村 孝司 陸自75

青森県偕行会は、昨年に引き続き8月6日、弘前市西茂森町の禅林街長勝寺敷地内に位置する「忠霊塔」周辺の清掃奉仕を、現職自衛官50名、隊友会員及び市民ボランティアら30名と協働で行った。



忠霊塔と岩木山

今年には異常気象か3年振りのねぶた祭りが初日から雨で、3日には大雨警報が発令され、青森県では初の線状降水帯が発生し、9日には再度の大雨警報で河川の氾濫が発生し、連日林檎園の水没等が全国版でニュース報道された。幸い6日は雨の中休みとなり、猛暑の中で、朝からぐんぐんと気温が上がり30度に迫る炎天下、草刈り機が「ウイーン」とけたたましい音をたてて作業が進んだ。

作業開始予定の8時半には、取材依頼をしていた地元新聞社の陸奥新報社の記者が到着した。陸奥新報社は昨年にも依頼に応じて記事が報道された。早速準備した資料を配付して「忠霊塔」の建設経緯などを説明した。資料は、偕行社が平成26年9月に発行した『陸軍墓地』の「第

つどい

青森県偕行会

「忠霊塔」周辺清掃奉仕など

38回 青森県弘前陸軍墓地、「偕行」(令和3年10月号「ついで」)の「青森県偕行会 忠霊塔周辺清掃奉仕」の記事及び乃木神社発行の「洗心」(1996号)の「魂忠魂碑 道内戦没者の慰霊」記事の忠魂碑に関する部分などをコピーした。

作業終了後には、長勝寺須藤龍哉任職による慰霊の読経が、忠霊塔入口前で行われた。須藤任職は、塔を管理する「宗教法人弘前仏舍利塔」の代表も務めている。読経が続けられる中、天内弘前駐屯地司令始め参加自衛隊員及び偕行会員等全員が忠霊塔1階中央の祭壇で焼香した。その様子や忠霊塔の管理に関する新聞記事が、弘前市を中心とした津軽地方のローカル紙「陸奥新報」第1面に掲載された。タイトル「行事復活塔を次代へ弘前・戦没者の供養塔「忠霊塔」奉賛会立ち上げ準備」と7段138行の記事と写真で紙面の約3分の1を占めた。

その内容は、偕行社発行の「陸軍墓地」を要約したような「忠霊塔の創設と変遷」【終戦後の紆余曲折】「次の世代に伝えるための奉賛会の立ち上げ」などが記された後に、今年も自衛隊OBによる草刈りの様子と、関係者の言として「昔は遠足の間としても親しまれた場所だか、いまでは遺族であっても存在を知らない人も増えた。全国的にも塔が残っているのは珍しく、地域として歴史を知らせ守っていくことも必要だ」が紹介され、須藤

任職の「歴史の一ページ」として塔がある。だが、世界の情勢を見ると戦争は現在進行形のこと。私たちも繰り返す可能性がある。私たちが平和に対する意識を持って生きることができれば塔の意味があり、その価値もあるはず。伝える意味はある」との言で締め括られていた。



陸軍墓地

### 旧弘前偕行社で2年振りの 青森県偕行会総会

会長兼事務局長

稲村 孝司 陸自75

青森県偕行会は、実りの秋を迎えた9月25日、旧弘前偕行社において令和4年度の総会を開催した。昨年はコロナ感染

症の脅威から急遽中止となり2年振りとなった。例年だと護國神社の正式参拝後に行うところ、審議事項が多いことから直ちに総会となった。先ず、一昨年と昨年の事業報告を行った。特に、昨年9月6日に急逝された第7代会長伊藤哲也氏の葬儀状況について、同会長の経歴と県偕行会発展に対する多大の貢献を交えて紹介した。

次いで、偕行社の定款、会員規程の改正について、「偕行」(令和4年5・6月号別冊)をもつて紹介した。特に、目的事業において、陸上自衛隊の支援を重視するものであり、英霊の慰霊顕彰及び自衛隊殉職者の追悼等は3番目に後退したこと、地域社会活動に対する協力が新たな事業として追加されたことを強調した。また、会員規程の改正により、会員の会費は年額5千円に一本化されたことも紹介した。

引き続き、「陸修会」設立について、設立記念式典の新聞記事を基に紹介した。同記事では吉田陸幕長の祝辞にも触れられ、弘前駐屯地司令も務められた同氏は「圭秀・けいしゅう」と親しまれているが、正しくは「よしひで」であることを紹介した。「陸修会」と偕行社が合同(合体)した場合、県偕行会はどうなるのか、どうあるべきなのか議論が盛り上がった。

特に、青森県の場合青森、弘前、八戸の3市に駐屯地があり、陸修会がそれぞれの支部を立ち上げた場合でも、偕行会は県単位で残すべきであるとされた。また、水交会会員でもある野村市議会議員からは、水交会は偕行社と違い、海上自衛隊創設直後から現役幹部が会員となり、現在でも良好な関係にあり、海軍の伝統が継承されているとの紹介があった。「偕行」11・12月号では「特集：偕行社とは何か」が載るので期待することとされた。

審議最後の懸案は、新会長の選任である。新会長は、平成23年の総会において、伊藤会長と共に事務局長に選任された小職を推す案しか提案されず、第8代会長に選任された。事務局長の適任者が不在で当分の間、会長兼ねて事務局長として励みますと決意を述べ総会を終了した。なお、今回をもって旧軍関係者は皆無となり、元幹部自衛官のみの総会・懇親会は15名の出席となった。

早速、会場南側の「遼止園」に出て全員で写真を撮った。伊藤前会長直筆の「青森県偕行会」の横幕と「英霊に敬意を」の垂れ幕が陽に映えた。懇親会は新会長献杯の発声で始まった。コロナ禍で春の花見に引き続き、5カ月振りの交流の輪を広げた。4時間に及んだ総会、懇親会の最後には、旧弘前偕行社は、極めて貴重な陸軍の遺産として、



旧弘前偕行社で記念撮影

今後百年先まで存続継承され、偕行会行事での利用はじめ全国からの偕行社会員の見学案内に、偕行会としても最善を尽くすべく話し合われ、来春の花見での再会を期して旧弘前偕行社を後にした。

なお、県偕行会会長は、伊藤前会長の遺志により、公益財団法人青森県護国神社奉賛会理事長を引き受けることとなつていくことから、護国神社齋藤宮司への連絡を行うこととした。